



「親子で読んでほしい」と話す竹内さん(東京都北区)

幼児の心模様を絵本に

小児科医、経験もとに3作

診察室で接する子どもをモデルに、小児科医が作った絵本シリーズが、評判を呼んでいる。幼児期の心の機微を描いた内容で、「子どもの心をケアする絵本」として、親にも参考になる。

このシリーズは「おうちあーん」(2003年、1000円)、「おねしょちゃん」(04年、1200円)と、先月発行された「あくじゅー」(1200円)の3作。文は東京都内の病院に

勤める小児科医の竹内紀子さん、絵は「稔幸」の名で宝塚歌劇団で活躍したアーティ

スト「のる」さんが担当した。

主人公は、小さな男の子だ

いちゃん」。3歳、4歳、5歳と1作ごとに大きくなり、

友人の「かぼくん」や近所の「フ」おぼさん」かしのき

おじさん」などの触れ合いを通じて成長していく。

1作目は、診察の時に口やのどの奥を診るために使われるへら「舌圧子」が苦手な

くらし 家庭

だいちちゃんと友人の交わりを描き、2作目は「おねしょをしなくなる呪文」を聞き、友人と共に山の仙人を訪ねる。3作目では妹が生まれ、母親と妹への複雑な思いを描いた。

竹内さんは、診察室で子どもたちと接するうちに、様々な思いを抱えながら、うまく表現できずにいることに気づいたという。「何でもないように振る舞っていても、おねしょを気にしていたり、弟や妹へのわだかまりがあったり。そんな心模様を絵本にして、子どもが乗り越えられるよう励ましたかった」と話す。

のるさんは「親にこそ読んでほしい絵本」と強調する。「私自身も出産を経て、だいちさんの姿が我が子に重なることがある。大人も気が付かざれることがあるはず」と話す。

問い合わせ、購入申し込みは、「子どものこみち21」(フックス03・33876・9008)へ。

4へ。